

博物館だより

No.191



令和4年10月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

博物館休館日カレンダー						
2022年10月						
日	月	火	水	木	金	土
25	26	27	28	29	30	1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31	1	2	3	4	5
休館日 ※情報はR4.9.17現在						



▲上段から草木画 中位に原稿類 下段に受賞作「コシャマイン記」ほかの著書

この展示(と収蔵資料) ココが見どころ、ココがツボ!!

●資料名
鶴田知也資料(つるともやしりま) 1括

※写真は資料群の一部
※現品は一部が堺葉山鶴田顕彰会の所蔵(当館寄託)

●データファイル

・法量等…総数約〇〇〇点(※整理中)

・制作年代…昭和初期(末期二〇)〜九〇年前後

・ポイント…未発表原稿等を含む資料群で十分な注視・分析が必要

●公開状況…保存等のため通常非公開

◆博物館NEWS

「文化のみやこづくり」記念プロジェクト

絵画・作文コンクール入選作品展示会

会期：10/5(水)〜10/30(日) 場所：博物館ホール

京築の子ども達お気に入りの風景や歴史に関する様々な思いを表現する「文化のみやこづくり」記念絵画・作文コンクール。今年も多くの作品が寄せられましたが、このほど第一次審査が終了し、お披露目準備が整いました。絵画は「わたしの町の過去・現在・未来」と題し、時を超えて愛すべき風景を描き、作文は様々な歴史たんけん(調査研究や取材、感想など)成果を綴っています。右の期間、博物館で展示致します。



▲審査後の作品展示の様子(写真は令和3年度) 絵画については期間中の有料入館者による投票でグランプリを決定します

アイヌ文化を活写したマンガとして話題になった「ゴルデンカムイ」。その連載を遡ること80有余年前、同じアイヌの英雄やその未裔の悲哀を描いて第三回芥川賞を受賞した人物が、本町出身の作家・農業指導者の鶴田知也です。

北海道の自然と人々の生き様に感動した鶴田は、その顕彰と芸文化に努め、北海道文学・労農文学の担い手として多くの作品を残すと共に、現代を生きる私達に向け「不遜なれば未来の悉くを失うこと」の警句を残してくれました。



▲鶴田知也(1902~1988) 今年生誕120年を迎えた



◆講座・教室・催し物ガイド

10月の歴史講座

【漢詩紀行講座】
10月1日(土) 9時30分〜
【古文書講座】
10月8日(土) 10時〜
【古典かな講座】
10月15日(土) 9時30分〜
【みやこ学講座】
10月22日(土) 10時〜

※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途通知します。

◆九州歴史資料館で特別展「京都平野と豊国の古代」が始まります

当館との交流も深い九州歴史資料館では特別展「京都平野と豊国の古代」を開催します。この展示はかつて「豊国」と呼ばれた京都平野の古代史を「深掘り」するもので、みやこ町を主役の一人にして貴重な資料が勢揃いします。

この秋はぜひ九州歴史資料館へお出かけ下さい!

会期：10/8(土)〜12/4(日)

場所：九州歴史資料館(小都市)

入場料：一般210円・高大生150円

備考：関連イベント多数。詳しくは同館HP等を参照下さい。



▲会場では先生の昆虫談義に加え「動物と虫の親子あてクイズ」「カブトムシのクラフト制作」など楽しめる学びと発見が満載でした

8月の業務日誌から

8月10日(水)、九州国立博物館で曼陀羅寺(勝山大久保)所蔵の仏画「当麻曼荼羅図」の修理内見が行われました。本仏画は傷みが激しく本格修理が望まれていましたが、県や町による支援体制も整い、このほど漸く実現の運びとなりました。

8月21日(日)、館内研修室で「昆虫博士のお話&工作会」が開かれました。講師に昆虫採集歴60年超の松田勝弘さん(文化遺産ボランティア会員)を迎え、たくさんの写真や標本を交えてのお話に、子どもたちも興味津々でした。



▲博物館内の修理工房で最初の工程を確認する関係者 解体した絵を徹底観察したのち最善の修理方針を固めてゆきます

みやこの歴史発見伝 152
日本製麻業の父
吉田健作



吉田健作 (1852~1892)

「飛行機」から「バッグ」まで

ライト兄弟が世界史上初の有人動力飛行に成功し、来年で120年を迎えます。人類の悲願であった大空への初飛行を成し遂げた飛行機の翼には、軽くて丈夫な「帆布」という布が張られていました。18世紀の日本では、兵庫県で廻船業を営んでいた実業家、工楽松右衛門がこれまでにない丈夫な船の帆「帆布」を開発します。この「帆布」や「帆布」は、いずれも麻や亜麻、綿素材を平織りして作られる厚手の布地で、一般的には「ズック」や「キャンバス」と呼ばれています。この生地は30年ほど前まで、この地域の中学・高校に通う男子生徒の通学カバンに用いられるなど馴染み深いものでしたが、近年は、化学繊維の普及などで消防ホースなどその用途が限られていました。しかし2年前の「レジ袋有料化」に伴い、耐久性



帆布地のトートバッグ

や速乾性に優れたこの生地のトートバッグの需要が一気に高まりました。この「帆布」は厚い生地のため手作業による大量生産には限界がありました。日本ですべて機械を使った「帆布」を大量に生産できる工場を設立した人物が、みやこ町勝山上田出身で元号「昭和」の考案者「吉田増蔵（学軒）」の兄「吉田健作」です。本年はこの吉田健作の生誕170年、没後130年にあたります。今回は西洋諸外国に遅れをとっていた明治時代に、産業振興の発展に尽くすため想像を絶する苦勞の末、41歳の若さで亡くなった彼の人生についてご紹介します。

大久保利通のもとで

吉田健作は、嘉永5年（1852）に京都郡上田村（現みやこ町勝山上田）で地元の庄屋などの要職を務めた温次（父）と仲津郡山鹿村（現みやこ町犀川山鹿）の出身イッ（母）との間に生まれました。健作は、父や弟の増蔵と同様に漢学者の村上仏山が開いた私塾「水哉園」（現行橋市上稗田）に入門します。

この塾で最も仲が良かった学友が、後に内務大臣となる末松謙澄（現行橋市前田出身）です。その後、明治7年（1874）に「小倉県」に勤務し、翌年2月に上京します。同年5月には内務省農務課勤務を命ぜられますが、これ以降、大久保利通が特に力を注いだ日本の産業振興策に深く携わることになります。

フランスにおける麻の研究

吉田健作は、産業振興策の中でも紡績業、特に製麻業の機械化による大量生産が急務であると周囲の人々に訴えます。この当時、軍隊で使用される軍服、軍用バッグ等、兵士の装備品からテントやロープに至るまで、その素材には麻（亜麻）が用いられました。このように「軍需物資」として不可欠な麻製品を他国から輸入することはできず、また手工業に頼っていた国内の帆布生産では大規模な軍隊の需要を満たすことはできませんでした。健作は、日本の気候・風土に適した亜麻の栽培から帆布製造技術の研究に没頭しますが限界を感じ、外国の先進地視察の要望書を内務省に提出します。彼の熱心な研究姿勢が認められ、明治11年（1878）開催されたパリ万国博覧会に松方正義副総裁が視察する際、その随行が許可されフランスに渡ります。

渡航船には、偶然にも末松謙澄も乗船しており、同郷の2人は再会を喜び、異国の地で国の発展のため尽くすことを誓います。フランスでは国力・技術力の圧倒的な格差を目の当たりにします。現実を痛感した健作はこの当時、繊維工業の先進都市であったフランス北部の「リール市」にあった大規模な亜麻の栽培農家に滞在することを決意します。昼間は麻の栽培技術の研究、夜はフランス語や機械工学など、文字通り「寝食を忘れて」製麻技術の習得に努めました。その結果、フランスが長い年月をかけて構築した麻の栽培から機械による麻布の製造に至る一連の技術や知識をわずか3年という短期間で習得したと伝えられ、国の発展のために尽くした彼の苦勞が偲ばれます。この時の無理がたたり、その後健作は重い喘息の持病を抱えることとなります。

製麻工場の設立

明治14年（1881）に帰国した健作は、休むことなく製麻工場建設の意見書・予算書などを農商務省に提出します。これまでにない近代的な工場設立には数々の困難が伴いましたが献身的な努力でこれを克服し、明治19年（1886）11月、現在の滋賀県大津市に日本初の機械

による近代的な製麻工場「近江製絲紡織会社」が開業しました。その後も健作の指揮により、明治23年（1890）4月には現在の栃木県に「下野麻紡織会社」、同年7月には「北海道製麻会社」が開業しました。これらの製麻工場設立は、大久保利通が目指した「日本の近代化」の原動力の一翼を担うこととなります。

健作の死とその後

明治25年（1892）2月5日、フランス滞在中に患った喘息の悪化により健作は41歳の若さで亡くなります。健作に仕えていた同郷の宮村朔三（現みやこ町勝山黒田出身）は健作の意志を継いで工場の生産拡大に努めると共に北海道の空知郡周辺の原野を開墾し、農場開発にも携わります。地元の人々は彼の功績を称え、彼の名を冠した「宮村神社」「宮村小学校」が建てられています。また健作は生前、農業振興策にも努め、農民の生活安定・向上のため様々な作物栽培も試みています。文字通り身を削って短期間で外国の先進技術を習得し、国の近代化に努めただけではなく故郷の発展や農民の生活向上まで視野に入れ産業・農業振興に取り組んだ故郷の先人の功績を永く後世まで伝えてゆきたいものです。

（井上信隆）